

- 研究要旨 -

道産樹種鋸屑培地におけるヒラタケ・タモギタケの発生

瀧澤 南海雄 小田 清
信太 寿

本道において多量に産出される針葉樹鋸屑を食用茸の栽培に利用する可能性を探るためと、広葉樹の中では何が培地原料として優れているかを知るために、道産樹種7種の鋸屑で調整した培地を用いてヒラタケ・タモギタケの瓶栽培試験を行った。なお本試験は第85回日本林学大会において発表したものである。

試験方法と考察

16~32meshにふるい分けした帯鋸屑と米糠を容量比で3:1に混合し、握って指間ににじむ程度の水を加えて800ccポリプロピレン瓶に詰め120で90分間殺菌した。接種後23でヒラタケは27日間、タモギタケは17日間培養し、菌カキを行わずにヒラタケは5~15に24時間で変温する人工気象装置内で、タモギタケは約15~30のビニールハウスで子実体を発生させた。

ヒラタケでは最も成績の良かったのがカラマツ・トドマツであり、逆にナラ・エゾマツは収量が少く、培地原料として不適とみられる。

タモギタケではニレ・カバが優れていたが、ナラは1次発生時の収量が極端に少く、ここでも不適とみられる。タモギタケの収量が全体的にヒラタケより劣ったのは、発生温度が高いため培地が乾き気味になり、加えて使用した菌株が特に水分を要求する性質であったために、2次発生が少なかったからである。

したがって1番採り後ただちに吸水させて芽出しを行えば、各樹種ともに収量が増加したものと推定されるため、シナ・エゾマツ・トドマツについてはさらに検討する。

ヒラタケ・タモギタケの両者で発生次数の経過について発生量は減少する傾向があったが、針葉樹培地では広葉樹培地に比して減少が甚だしい。これは樹種の

第1表 ヒラタケの樹種別平均収量

樹種	試験数	芽出しから1次発生までの日数	1瓶当りの平均収量(g)			
			1次発生	2次発生	3次発生	計
カラマツ	8	19.1	66.2	61.4	16.7	144.3
トドマツ	8	18.5	75.7	45.6	21.4	142.7
シナ	8	24.0	60.5	32.1	試験中止	92.6
カバ	8	21.0	58.0	28.0	30.7	116.7
ニレ	8	21.5	63.7	24.5	22.3	110.5
ナラ	8	29.1	36.0	27.8	21.6	85.4
エゾマツ	8	17.3	54.7	24.9	3.7	83.3

第2表 タモギタケの樹種別平均収量

樹種	試験数	芽出しから1次発生までの日数	1瓶当りの平均収量(g)		
			1次発生	2次発生	計
ニレ	10	7.0	87.6	39.4	120.7
カバ	10	6.6	86.2	29.1	115.8
カラマツ	10	7.0	83.8	8.9	92.7
シナ	10	8.2	78.0	6.1	84.1
エゾマツ	9	7.3	74.0	9.1	83.1
トドマツ	10	8.2	72.1	0	72.1
ナラ	10	8.9	54.3	11.3	65.6

腐朽性に関係があると推定され興味ある問題である。

今回の試験ではカラマツが両者の栽培に、トドマツがヒラタケの栽培に利用できることが明らかとなったが、しかしこの結果は、あくまでも瓶栽培においてのみ適応するものであることを明記したい。この後行った箱栽培ではカラマツ・トドマツともに両者の発生が不良であった。これは接種から発生まで長期にわたる箱栽培ではもともと米糠量が少ないため、鋸屑自体が栄養源として利用され易いか否かが発生量の多少に影響し、一方、瓶栽培では米糠の添加量が多く接種から発生までの期間も短いので、栄養分のほとんどは米糠に依存して鋸屑の腐朽性は大きな影響を及ぼさないためと筆者らは推定しているが、今後さらに検討を要しよう。

- 林産化学部 特殊林産科 -
(原稿受理 昭50.5.23)